

天正本『太平記』における武士への評価

——「いかめし」に着眼して——

大 坪 亮 介

はじめに

現存『太平記』諸本は、巻の区分法等から、一般的に甲類・乙類・丙類・丁類の四種に大別されている^①。このうち丙類本を代表する天正本は、独自の増補や本文改変箇所を多く有する。そのため、先行研究でも注目を集めてきた。例えば、特定の武士一族に関わる増補や、南朝を正統とする独自の皇統理解^②、あるいは、天正本が省筆した箇所^③に込められた政道観といった要素^④などが、天正本の特質として指摘されている。

天正本独自の本文改変は、主要人物の造型や評価にも及ぶ。この点について、北村昌幸氏は、足利尊氏の弟直義の形象に着眼し、天正本では人物像の整合性よりも、純粹に

物語世界を補完しようとした本文改編が施されていることを明らかにした^⑤。また筆者は前稿において、尊氏の子直冬に対する評価の相違から、天正本が「罪を緩める」ことに強い関心を寄せていることを指摘した^⑥。この前稿に引き続き本稿では、楠木正成を「いかめし」と評する箇所を端緒として、天正本における武士に対する評価の特色について論じていくことにしたい。

一 千早城の戦いにおける楠木正成

まずは、正成の評価に関わる箇所を挙げる。巻七「千劍破城之事」において、正成は千早城に籠もり、鎌倉幕府の大軍と対峙する。甲類本に属する玄玖本^⑦では、以下のように語られる。

千劍破ノ城ノ寄手ハ前ノ勢八十万騎ニ又赤坂ノ勢・吉野ノ勢馳加テ、百万騎ニ余リケレバ、城ノ四方二三里ガ間ハ見物相摸庭ノ如ク打困テ、尺寸ノ地ヲモ余サズ充満シタリ。旗ノ風ニ翻テ靡ク気色ハ秋ノ野ノ尾花ガ末ヘヨリモ繁ク、劍戟ノ日ニ映ジテ耀ケル分野ハ、暁ノ霜ノ枯草ニ布ケルガ如ナリ。大軍ノ近ヅク処、山勢モ是ガ為ニ動キ、時ノ声ノ震フ中チニハ、坤軸モシユユニ摧タリ。此勢ニモ不_レ恐シテ、纔_二千人ニ足ヌ小_一勢ニテ、誰ヲ頼ミ何ツヲ待トモ無キ城中ニ怵テ防戦ケル楠ガ心ノ程コソ不思議ナレ。

傍線部の通り、援軍もなく、わずか千人の小勢で八十万もの敵軍を迎え撃つ正成の心のありようが、「不思議」と評されている。

次に、天正本当該箇所を挙げる。

知和屋の寄手は、前に百八十万騎と聞えしが、また赤坂・吉野の勢加はつて、二百万騎に余りければ、城の四方四、五里の間は、見物相撲場なんどの如く打ち困んで、尺寸の字をも余さず充満たり。旌旗の風に翻つて靡く気色は、秋の野の尾花が末よりも繁く、劍戟の日に映じてかかやける有様は、暁の霜の枯草に布ける

が如くなり。大軍の近づくところ、山勢これがために動き、時の声震しき事、坤軸須臾に摧けたり。この勢にも恐れずして、わづかに千人に足らざる小勢にて、誰を憑みいつを待つとしもなく、城中に怵へて防ぎ戦ひける、楠が心の程こそいかめしけれ。

玄玖本とは細かな字句や数字の異同が見られるものの、両者の記述内容自体に大差はない。しかし、それぞれの引用箇所^①に太字で示したように、天正本は玄玖本とは違って、籠城する正成の「心の程」を「いかめし」と評している。

甲類・乙類・丙類・丁類に属する『太平記』主要諸本を見渡すと、当該箇所の記述は、以下のように分類される^②。

		正成への評価「不思議」	正成への評価「いかめし」
甲類	玄玖本 神田本 西源院本 神宮徴古館本 内閣文庫本 梁田本		
乙類	米沢本 梵舜本 益田本		
丙類	野尻本		天正本 教運本（義輝本） 龍谷大学本
丁類	日置本 武田本		

※丁類京大本は当該箇所を欠く。慶長八年古活字本等、流布本は「不敵」。

甲類・乙類・丁類はいずれも玄玖本と同様、この場面の正成を「不思議」とし、「いかめし」とするのは天正本を含む丙類に限られる。右表から明らかのように、天正本を含めた丙類本の多くと、その他の諸本とでは、正成に対する評価に顕著な違いが見られるわけである。

この正成評の相違は先行研究も注目するところであり、天正本を底本とする新編日本古典文学全集『太平記』第一冊「古典への招待」（長谷川端氏執筆）では、次のように説明されている。

『太平記』作者が、北条政権に対する後醍醐天皇の勝利を確信させる人物として形象したのがこの正成であり、正成形象化の中心を、作者は「不思議」という語によって捉えようとした。たとえば千早城合戦では、（中略）わずかな手兵で千早城を守る正成の「武略と智謀」とを考えると、とても人間わざとは思えないのである。このように超現実的なものへの驚きが「不思議」である。これが時を経て天正本になると、「楠が心の程こそいかめしけれ」と、正成の精神のありよ

うへの賛嘆へと移行する。正成の、「不思議」としかいいようのない「武略と智謀」に通底する、近寄りたいたい人間存在の持つ威圧感すら感じさせる語が「いかめし」である。そこには表現者の、正成への深い尊敬の念が見られる。この「いかめし」の語が、流布本では、「楠ノ心ノ程コソ不敵ナレ」と、現実的な不羈の精神を示す「不敵」という語に置き換えられている。いつてみれば、古態本の超現実的なレベルでの賞賛から、天正本の倫理的な視点を經由して、流布本の日常的・現実的レベルでの賛嘆へと変化しているのである。

このように、「不思議」から「いかめし」という評価の文言の変化が、古態本の「超現実的なレベルでの賞賛」から天正本の「倫理的な視点」を経て、流布本の「現実的レベルでの賛嘆」へと至るといって流れて捉えられている。この指摘は、天正本の特質や指向性を考える上で示唆に富む。しかし、次章で詳述するように、天正本全体にまで視野を広げると、「倫理的な視点」から戦場における武士の「精神のありよう」を「いかめし」と評価する箇所は、これ以外にも見出すことができる。

二 天正本における「いかめし」

前章で検討した例も併せると、天正本における「いかめし」の用例は、全部で十一例を数えることができる。以下、繁雑ではあるが、残りの十例を検討し、天正本における「いかめし」の意味用法について確認しておきたい。

①巻四「笠置城の囚人罪責評定の事」

この中にも、足助次郎重範をば、まづ六条河原にて首を刎ぬべしと、定められける。これが笠置の城にて大矢をいかめしく行跡たりしその故とぞ聞えし。

鎌倉幕府に反旗を翻した足助重範が、幕府軍に向けて大矢を「いかめしく」射た科により処刑されたという箇所である。ここでの「いかめし」は、具体的には幕府軍を散々に苦しめた、重範の矢の猛威を示すものと思われる。

②巻六「兵部卿宮芳野出御の事」

正成が一族二十余人、相隨ふ兵二百余人、誰を御方と憑むともなく、君のために身を忘れたる、忠義の程ぞいかめしきと、感ぜぬ者はなかりけり。

前章で取り上げた例と同様、正成が少数の軍勢で城に籠もり、鎌倉幕府の大軍を迎え撃つ場面である。ここでは、天

皇に対する正成の忠義の心が「いかめし」と評されている。天正本は千早城・赤坂城の戦いを描くに当たって、圧倒的劣勢のなか平然たる態度を崩さない正成の胆力や、天皇のためであれば危険も辞さない忠義の心を「いかめし」という言葉で表現しているわけである。

③巻九「番馬にて腹切る事」

「糟谷」宗秋こそまづ自害して、冥途の御伴をも仕らんと存じ候ひつるに、先に立たせ給ひぬる事こそ口惜しけれ。今生にては、命を涯の御先途を見終て進らせぬ。冥途なればとて、見放ち進らすべきにあらず。しばらく御待ち候へ。死出の山、三途の川の御供申し候はん」とて、越後守（筆者注、北条仲時）の柄口まで腹に突き立て置かれたる刀を取つて、おのが腹を八文字に掻き破つて、仲時の伏し給ひたる左の股に抱き付いてぞ伏したりける。誠にその忠義、哀れにもいかめしくも覚えける。

反鎌倉幕府軍の攻撃を受け、六波羅探題北条仲時が自害する。粕谷宗秋もその後を追うべく、主君が切腹を遂げた刀で腹を十文字に掻き切ったという。糟谷のこの凄絶な忠義の示し方を、天正本は「哀れにもいかめし」と表現してい

る。忠義を「いかめし」とする点では、先に見た②の正成の例と同じ用法といえる。しかし、この例では、忠義心は後醍醐ではなく、鎌倉幕府方の北条仲時に向けられている。ここからは、天正本が武士の忠義心を、陣営を問わず「いかめし」という言葉で評価していることが窺えよう。

④ 卷十三「眉間尺釘鏑劍の事」

（足利直義の命により、後醍醐天皇の皇子護良親王が殺害される。護良の首は討手の刀の切っ先を銜えたままであった）
淵辺甲斐守、かやうの不思議（筆者注、
眉間尺が口中に含んだ劍の鋒を吹きかけて楚王の首を斬ったという故事）を思ひ出しけるにや、兵部卿親王（筆者注、護良親王）の刀のさきを嚙ひ切らせ給ひて、御口の中に含ませ玉ひたるを見て、左馬頭殿（筆者注、足利直義）に近付けず、御頸を敷に棄てける遠慮の程こそいかめしけれと、かやうの事を知れる物は皆一同にぞ感じける。

淵辺甲斐守は、護良親王の首を直義に近づけなかった。それは眉間尺の故事を知っていたからであるという。中国の故事を踏まえ、主君に万一の危害が及ばないようにした淵辺の配慮が、この場面では「いかめし」と評価されている。

る。「遠慮」を「いかめし」とするのは奇異に見えるかもしれない。しかし、①のように矢の勢いなどではなく、武士の「精神のありよう」を「いかめし」と賞賛する点では、前章で取り上げた例や、右に挙げた②・③の例と通じるところがあろう。

⑤ 卷十四「勅使河原引き返し打死の事」

（勅使河原丹三郎）「危ふきを見て命を致すは、勇士の義なり。我何の顔あつてか、亡朝の臣として不義し、逆臣に順はん」といひて、三条河原より馬を進めて、鳥羽の羅精門の前にて、腹十文字にかき切つて、名を功臣の義にかへて、尸を戦場の土に残される。いかめしかりし振る舞ひとて、惜しまぬ物もなかりけり。

後醍醐天皇が足利尊氏の攻撃を受けて京から退避する。その際、後醍醐方の勅使河原三郎という武士が最後まで戦い切腹を遂げた。この箇所では、「逆臣」に背く「不義」よりも「勇士の義」を選んで自害した、その振る舞いが「いかめし」と賞賛されている。ここでの「いかめし」は、「義」を重んじることと関連付けられていると考えられる。この例でも、戦場における武士の倫理的な面に対して「いかめし」という言葉が用いられているようである。やは

り、武士の「精神のありよう」に関わる例といえよう。

⑥ 卷二十一「覚一真性連平家の事」

(来海五郎) 莞爾と笑ひ、「誠には執事(筆者注、高師直)の使にては候はず。これは塩冶殿の御内に来海五郎と申す物にて候ふが、宿の隔りたるにより、判官の落つるを存知せず、追ひ後れて候ふ間、ここに一命を棄て、冥土にて追ひ付き奉らんために、面々をば遮り留めたるなり」と云ひもあへず、五尺余りの太刀を抜きて、透間なくぞ懸かりける。志の程はいかめしけれども、一人なれば叶はず……

塩冶判官麾下の来見五郎が、自分を偽つて敵に襲いかかる。命を捨て、冥土で主君に追いつこうとするこの武士の「志の程」が、「いかめし」と評価されている。『新編日本古典文学全集』は、この箇所を「勇猛」と現代語訳している。確かに、この例では勇猛さが賞賛されているものの、右の文脈よりすれば、ここで焦点が置かれているのは主君を思う「志の程」であると判断されよう。その点では、この用例もまた、武士の「精神のありよう」に関わる例であると捉えられる。

⑦ 卷二十二「義助朝臣病死の事」

塩に追風に随つて、推し合ひ推し合ひ相戦ひけるその中に、大館左馬助氏明が執事、岡部出羽守が乗つたる舟十七艘、備後の宮下野守兼信左右に分れて漕ぎ及べたる舟四十余艘が中へ分け入つて、敵の舟に乗り遷り乗り遷り、皆引つ組んで海中へ飛び入りけるこそいかめしかりし行跡なり。

岡部出羽守らが敵の船に次々と乗り移り、最後は敵を道連れにして海中に飛び込んだという。ここで天正本は、岡部らの壮烈な戦いぶりを「いかめしかりし」振る舞いと評価している。この例は、②～⑥までの例とは異なり、「忠義」や「遠慮」といった「精神のありよう」とは直接結びつくものではない。

⑧ 卷二十二「義助朝臣病死の事」

十七騎の人々は、また馬の鼻を引き返し、七千余騎が真中を懸け破つて、備後を指して引いて行く。いかめしかりし振舞なり。

この例では、わずか十七騎で七千余騎もの敵勢を中央突破した勇猛果敢な退却戦が「いかめしき」振る舞いと表現されている。これは⑦の用例に近い用法といえよう。

⑨ 卷二十九「薩多山合戦の事」

上杉民部大輔・長尾左衛門が兵二千余騎、信乃を指して引きけるを、千葉が一族ども早川尻にて打つ留めんと支へ戦ひしが、軍利なくして、千葉介が兵ども残り少なに打たれにけり。上杉・長尾、一日ここに逗留し、敵の首五百余人を切り懸けて、実検してぞ通りける。敗軍の落武者、軍に勝つだにあり、いかめしかりし行跡かなと、ほめぬ者こそなかりけれ。

上杉・長尾の軍勢が戰場から退却する途中、千葉の一族と交戦する。上杉・長尾はこれを打ち破り、五百もの首級を挙げ、首実検をした。それが「いかめしかりし行跡」と賞賛されている。『新編日本古典文学全集』が「おごそかで恐ろしい行為」と訳出するように、ここでの「いかめし」は、武士の行動の壮烈さを評価するものであり、その点では、⑦・⑧の例に近いと捉えられよう。

⑩ 卷三十七「畠山道誓関東没落の事」

（遊佐入道性阿、主君畠山道誓が没落し京都に逃れたことを知り、自身も落ち延びようとする）遊佐入道は禪僧の衣を着て、ただ一人湯本までぞ落ちたりける。口の脇の疵を隠さんと、袖にて口覆ひして通りけるを人恠しめてとがめける間、遁るべき便なしと思ひけ

ん、宿屋の中門に走りあがり、近付く物二人取つて引きよせて指し殺し、吾がど笛かき切つて、返す刀を腹に突き立てて、袈裟を引きかづきてぞ臥したりける。死を義に守る事多しと云へども、いかめしき行跡かなと、讚めぬ物こそなかりけれ。

逃げ延びることが叶わないと知った遊佐入道は、たちどころに討手を二人まで殺害し、自身も壮絶な自害を遂げた。この遊佐の行動に対して、「死を義に守る事」は多いが、これは特に「いかめしき行跡」であったとされる。ここでは「死を義に守る事」と「いかめしき行跡」とが関連付けられている。この「いかめし」は、②・⑥の例と同様、戰場における武士の「精神的ありよう」に言及した例であると捉えられよう。

以上、天正本における「いかめし」の用例を概観してきた。右の十例中六例（②・③・④・⑤・⑥・⑩）に加え、前章で検討した例も含めると、全十一例中七例が、「倫理的な視点」から、「忠義」や「遠慮」といった戰場における武士の「精神のありよう」を評価するのに用いられていることが分かる。では、こうした傾向は、『太平記』の他本においても当てはまるのであろうか。

三 『太平記』他本における「いかめし」

天正本では「いかめし」が十一例確認できた。金四十巻にもおよぶ現存『太平記』において、この数は決して多くはないように見える。しかし、天正本と他本とを比較した時まず気付かされるのは、意味用法の違い以前に、「いかめし」の用例数に際立った違いが認められるということである。以下、甲類本の中でも「古態の太平記の標準的なテキスト」とされる玄玖本との比較を中心として、天正本と他本との違いを示すことにしよう。

玄玖本の用例は、巻十四「官軍引退箱根之事」の一例にとどまる。

橋二間斗落テ渡ルベキ様モ無リケルヲ、船田入道ト大將（筆者注、新田義貞）ト、二人手ヲ取組テユラリト飛渡給フ。其跡ニ候ケル兵廿余人飛兼テ暫シ佻働ケルヲ、伊賀国ノ住人名張八郎トテ名譽ノ大力ノ有ケルガ、イデ渡テ取セントテ、鎧武者ノ総角ヲ取テ中ニ提ゲ、廿人コソ抛越ケレ。今二人残テ有ケルヲ、左右ノ脇ニ軽々ト挟テ、一丈余落タル橋ヲユラリト飛テ向ノ橋桁ヲ踏ケルニ、踏所少シ動カズ。誠ニ軽ゲニ見ケレ

バ、諸軍勢遙ニ是ヲ見テ、「アライカメシヤ。何モ凡夫ノ業ニ非ズ。大将ト云、手ノ物ト云ヒ、何ヲ可捨トモ覚ネドモ、時ノ運ニ引レテ此軍ニ打負給ケル方見サヨ」ト云ヌ人コソ無リケレ。

橋の中段が二間ほど落ちて対岸に渡りかねていたところ、名張八郎なる「名譽ノ大力」が鎧武者たちを次々と放り投げて向こう側へ渡した。最後の二人は脇に挟んで飛び渡り、軽やかに着地したという。ここでは、名張の「凡夫ノ業」とは思えない怪力ぶりと身のこなしが、諸軍勢の口を借りて「いかめし」と賛嘆されているわけである。

この場面は、前章までで見た天正本における「いかめし」の用例には含まれていない。天正本当該箇所本文を挙げよう。

伊賀国の住人名張八郎とて名譽の大力ありけるが、「いで渡してとらせん」とて、冑武者の上巻を纏んで中に指し上げ、二十人までぞ抛げ超しける。今二人残りたりける兵を、左右の脇に引き挟み、誠に軽氣に向ひの岸へ飛び越えたりければ、これを見る諸軍勢、「さらに凡夫の態にはあらず」とぞ申しける。大将も手の者もこれほどに勝れたる人にして、この軍に負け

玉ひぬる事、天運といひながら、不思議なる事かなと、謂はぬ物もなかりけり。

天正本は他本には見られる「いかめし」を用いず、単に名張の所業が常人離れしたものであったことを「さらに凡夫の態にはあらず」と語るに過ぎない。

これとは対照的に、天正本における「いかめし」の用例は、いずれも玄玖本には見られない。一例を挙げよう。前章で⑩の用例として挙げた、遊佐入道の最期を「いかめし」と評する箇所は、天正本では遊佐が最期に二人の敵を殺害したという奮戦ぶりを語り、さらに「死を義に守る事」と「いかめしき行跡」とが関連付けられていた。この箇所が、玄玖本では次のような本文となっているのである。

宿屋ノ中間ニ走上テ自吭ヲ搔放チ、返刀ニ腹切テ、袈裟引覆テ死ニケリ。

玄玖本では、遊佐入道が自害したことだけを語る簡略な記述となっている。天正本の他の例もこれと同様である。ここからは、「いかめし」という言葉に対する天正本の指向性が浮かび上がってこよう。

加えて見逃せないのは、天正本における「いかめし」の

多く(十一例中七例)が、忠義や遠慮、志といった、戦場における武士の「精神のありよう」を評価するのに用いられていたことである。これに対して、玄玖本では、「いかめし」が常人離れした身体能力を評価するのに用いられている。この点よりすれば、天正本は「いかめし」の用例数だけでなく、用法においても玄玖本とは傾向を異にしているようにも見受けられる。しかし、玄玖本も含め、天正本以外のテキストでは「いかめし」の用例が少ないため、『太平記』諸本間での比較だけでは、天正本における「いかめし」の特質を見定めるには不十分であろう。そこで次に、国語学の成果に拠りつつ「いかめし」の意味用法とその歴史について概観していくことにしたい。

四 「いかめし」の歴史の変遷

「いかめし」が文献上初めて現れるのは、中古に入ってからのことである。中古における「いかめし」の意味用法については、儀礼や饗応の豪勢さ、あるいは建物の立派さなどを肯定的に評価する例が多く、数量の多さ・形の大きさに関連することが指摘されている。『今昔物語集』が編纂された院政期に至って、「ものものしい、気高い、恐ろ

しいの意味をもち、大きい、力強い、怖ろし気なる意味と類義の関係にある」例が確認できるようになるという。

鎌倉期に入ると、「いかめし」の用例数は減少する一方¹⁴で、その意味用法には変化が生じてくるという。すなわち、山本佐和子氏は、説話集や軍記物語において「人の感情や評価を表す例が見られる」ようになると指摘し、次の二例を挙げている。

一例目は『保元物語』中巻「白河殿攻め落す事」、源為朝の弓勢について語る箇所である。ここでは、山本氏の論考が依拠する日本古典文学大系（底本は金刀比羅本）の本文掲げる。

御覧候へ。八郎御曹司のあそばされて候なる弓勢のほ
どのおそろしさよ。平氏が郎等の馬と覚え候。縦番匠
が鑿にてうち候とも、やはか輒是ほどは通り候べき。
あないかめしの御事候や。

為朝の弓勢の「おそろしさ」が、「いかめしの御事」とさ
れている。山本氏は、この例が中古の和文にはない感嘆文
であることに注目している。

二例目は、『太平記』巻二十二「義助朝臣病死事付鞍軍
事」、前章で挙げた天正本の用例⑦と同じ箇所である。こ

こでも、山本氏の論考が依拠する日本古典文学大系（底本
は慶長八年古活字本）の本文を引く。

十七騎ノ人々ハ、又馬ノ鼻ヲ引返シ、七千余騎ガ真中
ヲ懸破テ、備後ヲ差テ引テ行。イカメシカリシ振舞
也。

先に見たように、この箇所では、十七騎で七千余騎もの敵
勢を中央突破した勇猛果敢な戦いぶりが「イカメシカリシ
振舞」と評価されている。

これらの用例を挙げた上で、山本氏は、軍記物語におけ
る「いかめし」の特色を以下のように整理している。

この時期には、中古和文に見られなかった例15（筆者
注、『保元物語』の例）のような感嘆文が見られる。

また、例16（筆者注、『太平記』の例）のように、戦
さでの行動に対して、語り手が「勇敢だった」などの
評価を表す例が多く認められる。資料の内容のためで
あるが、軍記物語では、儀礼・饗宴については用い
ず主に武勇に関して用いられ、数や大きさで勝り、力
や勢いがあることを表す。ただし、この場合も、「乱
暴である」「残酷である」等の所謂「マイナスイメー
ジ」は伴わない点は重要である。

勇猛な振る舞いや常人離れした武勇を評価する例は、さき
に確認したように、天正本にも複数存在していた。そのため、この指摘は、天正本における「いかめし」の位相を探
る上でも参考となろう。しかし、天正本の用例の大半は、
力や勢いというよりも、忠義や遠慮といった倫理的な面を
評価するものであった。天正本における「いかめし」の意
味用法は、国語学の先行研究で示される「いかめし」の範
疇に収まりきらない点に大きな特色があるといえよう。

加えて、山本氏の論考に限らず、「いかめし」に関する
国語学の研究では、『太平記』を日本古典文学大系に拠り
引用・分析している点も看過できない。というのも、日本
古典文学大系『太平記』の底本は、前述のように流布本に
属する慶長八年古活字本であり、該本の成立に際しては、
天正本の影響下にある梵舜本の本文が多く用いられている¹⁶
からである。右に挙げた巻二十二「義助朝臣病死事付轡軍
事」の例は、流布本を除けば梵舜本・天正本にしか存在し
ない。このことよりすれば、当該箇所は『太平記』諸本共
通の本文ではなく、天正本の段階で新たに付加され、さら
に梵舜本・流布本へと引き継がれたものと見なせよう。¹⁷

流布本には、「いかめし」の用例があつて一例確認できる。

一例は先に見た玄玖本の例と同じ箇所で、天正本・梵舜本
には存在しない。もう一例は、逆に天正本・梵舜本には存
在し、玄玖本等には見られない¹⁸。つまり、流布本の「いか
めし」全三例のうち二例が、天正本段階での本文改編増補
に由来すると考えられるのである。国語学の分野では、
「いかめし」の研究の蓄積があるものの、これらの研究で
は、流布本文により『太平記』の分析をしている。国語
学の成果を援用しつつ天正本における「いかめし」の特質
について考えていくには、この点に留意しておく必要があ
る。その上でさらに、他の軍記作品も視野に入れた分析が
求められるであろう。

五 軍記物語の「いかめし」

『太平記』以外の軍記物語における「いかめし」の出現
数や、意味用法はいかなるものなのであろうか。本稿で
は、『将門記』に始まり、『陸奥話記』・『保元物語』・『平治
物語』・『平家物語』（覚一本・延慶本・長門本）・『承久記』
・『梅松論』・『源威集』・『明德記』・『応永記』を対象に用
例検索を行った¹⁹。その結果、「いかめし」の用例が確認で
きたのは、『保元物語』・『平家物語』（延慶本・長門本）に

絞られる。

まず、『保元物語』では以下の五例が確認できる。

①中巻「白河殿へ義朝夜討チニ寄セラルル事」

筑紫ノ八郎殿ノ弓勢ノイカメシサヨ。

②中巻「白河殿へ義朝夜討チニ寄セラルル事」

八郎殿ノ弓勢イカメシト云共……

③中巻「白河殿攻メ落ス事」

八郎ガ弓勢イカメシト云共……

④中巻「白河殿攻メ落ス事」

下野守義朝、門前へ進ミ出テ、「八郎ガ弓勢イカホド

ゾ。イカメシト云ナルヲ、義朝、試」ト宣ケレバ……

⑤下巻「為朝鬼島ニ渡ル事并最後ノ事」

十八歳ニテ都へ上リ、官軍ヲ射テカキナヲ拔レ、伊豆

ノ大島へ被_レ流テ、カ、ルイカメシキ事共シタリ。

五例中①・②・③・④の四例が、為朝の弓勢の強さを「イカメシ」と表現する例であり、残る⑤は為朝の伊豆大島での暴れぶりを「イカメシ」とする。いずれも、山本氏の論考の表現を借りるならば、為朝の「力や勢い」を表す例といえよう。天正本の用例の大半を占めていた戦場における武士の「精神のありよう」を評するものではない。

次に『平家物語』の例を挙げる。前掲した坂詰氏の論文では、鎌倉期の二十作品の「いかめし」の用例が検討されており、ここでは『平家物語』の用例はないとされている。しかし、これも『太平記』と同様日本古典文学大系（底本は覚一本）に拠る数字である。読み本系に属する延慶本を見ると、「いかめし」が五例確認できる。

①第二末「文学伊豆国へ被配_三流事」

（文覚）其間湯水ヲダニモ飲ズ。マシテ五穀ノ類ハ云

ニ不_レ及。サレドモ色力少モ不_レ衰、行打シテ有ケレ

バ、文学ハ昔ヨリサルイカメシキ者ニテ、身ノホドア

ラハシタリシ者ゾカシ。

②第二末「福田冠者希義ヲ被_三誅事」

（河野通清が平家に背くが、討伐された）通清ハイカ

メシク思立タリケレドモ、カヲ合スル者ナカリケレ

バ、終ニ高信法師ガ手ニ懸テ打レニケリ。

③第三本「大政入道他界事付様々ノ怪異共有事」

入道（筆者注、平清盛）ハ音イカメシキ人ニテオワシ

ケルガ、音モワナ、キ、息モヨワク事ノ外ニヨハリテ

……

④第三末「法皇忍テ鞍馬へ御幸事」

一条京極ニテ弓ノツルウチス。其音イカメシク聞ユ。

⑤第五本「兵衛佐ノ軍兵等付宇治勢田事」

佐々木ノ四郎高綱、宇治河先陣渡シタリヤトゾ名乗ケル。生喰ハ河ノ深クナルマ、ニ、ス、ミ出ル事一ハヤシ。(中略)六反計先立テ、向ノ岸ニサトノボル。

ツク郎従一人モナガサレザリケリ。佐々木ハ独言ニ、「穴イカメシヤ」トゾ云タリケル。

①は苛酷な修行によっても損なわれない文覚の肉体の強壯さを表しており、②は、平家に背いた河野通清の決心を「イカメシク思立ケレドモ」と評している。③・④は音声の大きさを「イカメシ」とする。最後の⑤では、名馬生喰に跨がり宇治川渡河を果たした佐々木高綱が、後ろを振り返り「穴イカメシ」と漏らす。直前の記述よりすれば、高綱は、後続の軍勢が一人残らず激流を渡りきったことを「イカメシ」と賛嘆していると見なせよう。ただし、『延慶本平家物語全注釈』が「自己あるいはイケズキへの評価と読む可能性や、二万五千余騎の軍勢全体の景観への批評と読む可能性もあろうか」と指摘するように、ここで「イカメシ」とされる対象については、他に複数の可能性が考えられよう。しかし、いずれにせよ、⑤の例での「イカメシ」が力強さや勇猛さを表していることは動くまい。

このように、延慶本では、音声の大きさや、勇猛さ、力強さを示す例が五例中四例を占める。②のように、無勢ながら拳兵に踏み切った決意に対して「いかめし」を用いる例はあるものの、天正本とは違って、「精神のありよう」を「いかめし」と評する傾向は特に窺えない。同様のことは長門本についても当てはまる。²⁰⁾

以上、『太平記』以外の軍記物語における「いかめし」の用例を概観してきた。天正本は『太平記』他本だけでなく、軍記物語全体の中でも、「いかめし」という言葉を多用していることが浮き彫りとなろう。

さらに、その意味用法についても、天正本の独自性が認められる。これまで見たように、天正本以外の他作品の用例のほとんどは、先行研究で言及されている「主に武勇に関して用いられ、数や大きさで勝り、力や勢いがあることを表す」という意味用法の範疇に収まるものであった。少なくとも、「忠義」や「遠慮」といった、「精神のありよう」を評する例は、天正本以外にはほとんど見当たらない。これに対して天正本は、むしろこうした「精神のありよう」に対して「いかめし」を用いる例が大半を占めてい

た。しかもそれらは、該本独自の増補箇所集中していた。ここからは、天正本が「いかめし」を多用するのみならず、その意味用法においても、その他の軍記物語と一線を画していることが明らかとなるのである。

おわりに

本稿の最初に述べたように、天正本の「いかめし」をめぐっては、従来『太平記』諸本間での楠木正成像の変化という観点から分析が行われてきた。しかし、本稿での考察よりすれば、天正本における「いかめし」は、単に一人物の造型の問題にとどまるものではない。該本は武士の「精神のありよう」に他にはない関心を寄せ、しかも独特の表現で評価していることが浮かび上がってくるのである。本稿ではその背景まで説明するには至らず、微細な現象の指摘にとどまったものの、これが『太平記』諸本はおろか、他の軍記物語にも見いだしたい、天正本独自の傾向であることを示し得た。

天正本は他本にはない独自箇所を多く有している。筆者も以前、こうした箇所の分析を行い、後醍醐天皇周辺の真言僧・真言寺院に対する関心や、罪を緩めることを称揚す

る傾向を見せることを指摘した²²⁾。これらの増補・本文改変箇所からは、天正本の多様な関心が窺える。武士の忠義や周到さといった「精神のありよう」を「いかめし」と評価する独自箇所もまた、こうした関心の一つの表れと捉えることができよう。

加えて、本稿で取り上げた「いかめし」については、広く室町期における武士の自己認識や評価といった問題にも接続していく可能性がある。というのも、天正本が成立したとされる十五世紀²³⁾は、ちょうど武士の倫理観や自己意識が文献上に表れてくる時期に当たっているからである。すなわち、佐伯真一氏は、「弓箭の道」という言葉の用例を通時的にたどり、『太平記』の段階においても、この言葉が「道徳的規範を意味する語として成立している」とは言えまい」としながらも、「精神的・倫理的な問題に関わる例が増えた」ことを指摘している。そこから「武士らしさをこうした精神性や倫理において捉える傾向」が高まっていると論じ、十五世紀半ばに成立した『義貞軍記』において、「武士の「道」に関する自覚的な思考の表現」が初めて出現するとの見取り図を提示している²⁴⁾。

また筆者もその驥尾に付して、明徳の乱を描く軍記物語

『明德記』が、「弓矢」という語を武士の倫理に関わる表現として多用していることを指摘した。⁽²⁵⁾

このように、『太平記』が成立した十四世紀の終わりから十五世紀半ばにかけて、武士は自分たちのあるべき姿、倫理感を自覚的に語るようになっていく。天正本が戦場における武士の「精神のありよう」に関心を向け、それを独自の表現で評価することは、こうした武士の倫理観の表出という現象とも連動している可能性が考えられよう。本稿で注目した表現レベルでの異同や、武士の「精神のありよう」に対する評価といった側面から該本を検討していく余地は、まだ残されているように思われる。

注

(1) 鈴木登美恵 『玄玖本太平記』「解題」(勉誠出版、一九七五年)

(2) 鈴木登美恵「佐々木道誉をめぐる『太平記』の本文異同——天正本の類の増補改訂の立場について——」(『軍記と語り物』第二号、一九六四年十二月)は、佐々木氏の関与を想定する。しかし、この見解については、和田琢磨『太平記』と武家——天正本と佐々木京極家の関係を中心に——(松尾葦江編『軍記物語講座3 平和の世はくるか 太平

記』花鳥社、二〇一九年)の批判がある。

(3) 鈴木登美恵「古態の『太平記』の考察——皇位継承記事めぐって——」(『国文学 解釈と教材の研究』第三十六巻第二号、一九九一年二月)。李章姫「天正本『太平記』巻二十六「大稲妻天狗未来記事」の視点」(『軍記と語り物』第五十二号、二〇一六年三月)等。

(4) 李章姫「天正本『太平記』巻二十七「諸卿意見被下論旨事」における漢楚合戦記事をめぐって」(『日本文学誌要』第九十五号、二〇一七年三月)。

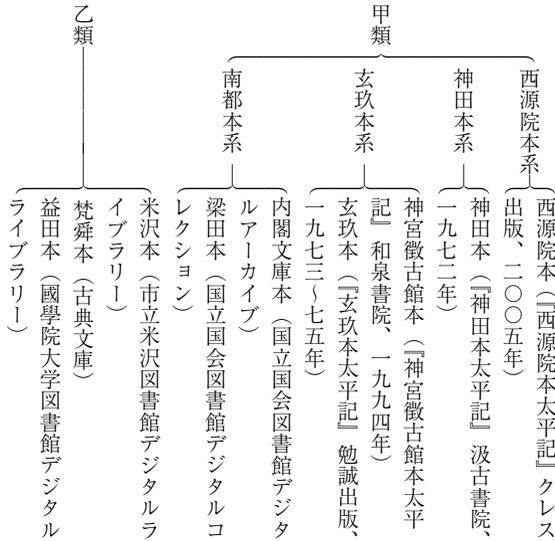
(5) 北村昌幸「足利直義像の改修」(北村昌幸『太平記世界の形象』塙書房、二〇一〇年(初出は一九九九年))。

(6) 拙稿「天正本『太平記』における刑罰——足利直冬の形象を端緒として——」(『大阪大谷国文』第五十一号、二〇二一年三月)。

(7) 引用は、『玄玖本太平記』に拠る。

(8)

本稿で参照した『太平記』テキストは以下の通り。

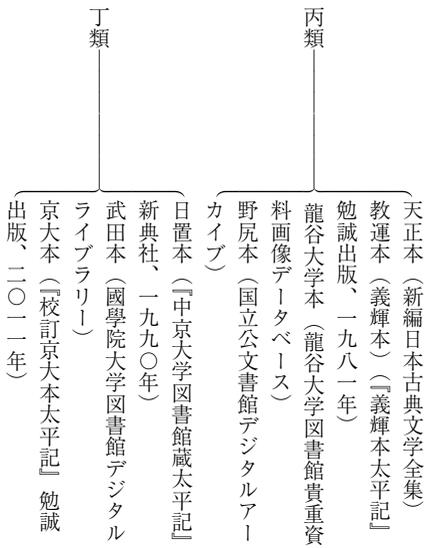


(9)

注(1)に同じ。

(10) 本稿第一章で挙げた、巻七「千劍破城之事」も除いた残り九例について、天正本に対応する玄玖本の本文を挙げる。付した番号は、第二章の天正本の用例に付したものに对应している。

- ① 卷四「笠置囚人死罪流刑之事」
足助次郎重範ヲバ、六条河原ニ引出シ、首ヲ可レ刎ト定ラル。
- ② 卷六「関東勢上洛之事」
当該箇所ナシ。
- ③ 卷九「番馬自害之事」



「宗秋コン先自害仕テ（中略）死出山ノ御伴申候ハン」ト云テ、越後守ノ柄口マデ腹ニ衝立テ被_レ置タル刀ヲ取テ己ガ腹ニ衝立テ、仲時ノ膝ニ抱付テ虚伏ニコソ伏タリケレ。

④卷十三「中前代挙動之事付籠舎宮被誅之事」当該箇所ナシ。

⑤卷十四「勅使河原自害之事」

「危ヲ見テ命ヲ致ハ忠臣ノ義ナリ。我何ノ顔アテカ、亡朝ノ臣下トシテ不義ノ逆臣ニ随ハント」云テ、三条河原ヨリ父子三騎引返テ、鳥羽ノ羅精門ノ辺ニテ腹掻切テ死ニケリ。

⑥卷二十一「塩冶判官讒死之事」

（塩冶の郎等）莞爾ト打笑テ（中略）抜テカ、ル。五騎ノ兵共抜合テ、時移マデ切合ケルガ、三人ニ手負テ、我身モ二太刀マデ切レニケレバ、是マデトヤ思ケン、塩冶ガ郎等、爰ニテ腹掻切テ死ニケリ。

⑦卷二十四「義助死去之事」

舟十七艘、備後ノ宮下野守兼信、左右ニ分レテ漕並タル舟四十余艘ガ中ヘ分入テ、敵ノ船ニ乗移々々、皆引組テ海ヘ入ニケリ。

⑧卷二十四「備後頼軍之事」

十七騎ノ人々、又馬ノ鼻ヲ引返シ、七千余騎ガ中ヲ颯ト懸被テ、一騎モ終ニ打レズ道後ノ方ヘソ落行ケル。

⑨卷三十「那波軍之事」

上杉民部大夫・長尾左衛門尉ガ勢ハ、二万余騎、信濃ヲ志テ落ケルヲ、千葉介ガ一族共五百騎計ニテ早河尻ニテ打止ント為ケルガ、落行大勢ニ取籠ラレテ、一人モ残ズ打レニケリ。

いづれの例も、「いかめし」を欠くか、「いかめし」を含む部分そのものを欠いている。他のテキスト（丙類を除く）では、以下の三本が天正本と一致する箇所を有する。対応する番号を示す。

内閣文庫本……⑦・⑧

梵舜本……⑤・⑦・⑧

武田本……③

(11) 坂詰力治「形容詞「いか（厳）し」の消長―「いかめしい」「いかめい」との関連から―」（鎌倉時代語研究会編『鎌倉時代語研究』第二十三輯、武蔵野書院、二〇〇〇年十月）。

(12) 遠藤好英「いかめしい（厳しい）」（佐藤喜代治『現代日本語の語彙』明治書院、一九八三年）。

(13) 注(12)に同じ。

(14) 注(11) 坂詰氏論文では、鎌倉期に成立した二十作品（『高倉院厳島御幸道記』・『高倉院升霞記』・『無名草子』・『閑居友』・『方丈記』・『たまきはる』・『建礼門院右京大夫集』・『保元物語』・『平治物語』・『平家物語』・『宇治拾遺物語』・『海道記』・『竹むきが記』・『東関紀行』・『十訓抄』・『十六夜日記』・『沙石集』・『うたたね』・『中務内侍日記』・

『徒然草』のうち、「いかめし」は「四作品（筆者注、『保元物語』・『宇治拾遺物語』・『十訓抄』・『徒然草』）に九例しか」見られないことが指摘されている。

- (15) 山本佐和子「イカマイの意味―イカメシイ・イカマイとの関わり―」（国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究』第二十五集、和泉書院、二〇〇六年三月）。

- (16) 小秋元段「流布本『太平記』の成立」（増補 太平記と古活字版の時代）新典社、二〇一八年（初出は二〇〇〇年）。小秋元氏はこの論考において、慶長八年古活字本の底本である慶長七年古活字本が、「巻十九から巻二十一を除くすべての巻で、梵辭本を基底とする」こと、そして「慶長八年刊本が七年刊本を底本にして、それぞれ複数の写本との対校を行」っていることを指摘している。

- (17) 玄玖本当該箇所本文は以下の通り。

十七騎ノ人々、又馬ノ鼻ヲ引返シ、七千余騎ガ中ヲ颯ト懸破テ一騎モ終ニ打レズ、道後ノ方ヘゾ落行ケル。

- (18) 巻二十二「義助朝臣病死事付頼軍事」には、「舟四十余艘ガ中ヘ分入テ、敵ノ船ニ乗遷々々、皆引組テ海中ヘ飛入ケルコソ、イカメシケレ」とある。これは本稿中でも述べたように、天正本の段階から増補された箇所である。

- (19) 参照したテキストは以下の通り。

『将門記』……………真福寺本（新編日本古典文学全集）
『陸奥話記』……………国会図書館本（新編日本古典文学全集）
『保元物語』……………半井本（新日本古典文学大系）

『平治物語』……………陽明文庫本・学習院大学図書館本（新日本古典文学大系）

『平家物語』……………覚一本（新編日本古典文学全集）

延慶本（北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語 本文編』勉誠出版、一九九〇年）

長門本（『長門本平家物語』麻原美子・小井土守敏・佐藤智広編、勉誠出版、二〇〇四―二〇〇六年）

『承久記』……………慈光寺本（新日本古典文学大系）

『梅松論』……………京大本（『京大本梅松論』京都大学国文学会編、一九六四年）

『源威集』……………佐竹本（平凡社東洋文庫）

『明德記』……………書陵部本（和田英松『明德記 本文と基礎的研究』笠間書院、一九九〇年）

『応永記』……………群書類従本（群書類従）

- (20) 長門本は、延慶本①～④までの例を有しており、⑤の用例を欠く。

- (21) 拙稿「天正本『太平記』における真言関係記事の増補」（『南北朝軍記物語論』和泉書院、二〇二〇年（初出は二〇一七年））。

- (22) 注（6）に同じ。

- (23) 長坂成行「天正本太平記成立試論」（『国語と国文学』第五十三卷第三号、一九七六年三月）。

(24) 佐伯真一「兵の道」・「弓箭の道」考（『軍記物語と合戦の心性』文学通信、二〇二二年〈初出は二〇〇六年〉）。

(25) 拙稿「『明德記』における「弓矢」」（松尾葦江編『軍記物語講座4 乱世を語りつぐ』花鳥社、二〇二〇年）。

※本稿は、JSPS科研費（基盤研究（C）：課題番号 18K03311 研究代表者小秋元段）による研究成果の一部である。

（本学日本語日本文学科専任講師）